

平成 26 年 5 月 20 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531157

研究課題名(和文) マルチモーダルテキストを「よむ」学習活動の創発に向けた理論的基盤の構築

研究課題名(英文) Building a theoretical foundation for the emergence of learning activity Read multimodal text

研究代表者

中村 敦雄 (NAKAMURA, Atsuo)

明治学院大学・心理学部・教授

研究者番号：60323325

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、これまで教科書に印刷された文字教材が学習における中心を成してきた国語科にあって、映像や図表等もテキストとして位置づけ、メディアの技術革新に対応させた「よむ」学習活動を支える理論的基盤を解明することを目指した。そのアプローチとして、戦前から現代にいたる広範な期間における「よむこと」の実態を解明するとともに、周辺関連分野の先行研究を渉猟し、理論的な枠組みを解明した。

また、試行的な教育実践等を対象とした参与観察研究として、群馬大学の附属学校において実証実験を行い、国語科としての新しい学習指導のあり方の概容を解明した。

研究成果の概要(英文)：In this study, So far from the center of the learning materials character that is printed on the textbook in the language arts, I aimed to elucidate the theoretical substrate to support Reading the learning activities positioned as text tables and figures such as video, made to correspond to the innovation of media. As the approach, as well as to elucidate the reality of the Reading in the wide range of the period leading to modern before the war, examine the previous studies of peripheral related fields, was to elucidate the theoretical framework.

In addition, as a participant observation study of educational practices, such as a trial, the experiment was carried out in affiliated schools of Faculty of Education, Gunma University, was to elucidate the new curriculum as a language arts.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学 教科教育学

キーワード：国語科教育学 メディア・リテラシー

1. 研究開始当初の背景

国語科では、これまで教科書に印刷された文字教材が学習における中心を成してきた。その一方で、言語以外の媒体はせいぜいのところ参考程度で、軽視されがちであった。

そうであったのが、2005年のPISAショック以降、国際的調査にあって言語以外の映像や図表等も「非連続型テキスト」として位置づけ、その読みも測定対象にしていることが周知のこととなった。そのため、具体的な対応が重要な課題となっていた。加えて、各種メディアの技術革新に対応させる必要性も指摘されるにいたっていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近年急速に浸透しつつあるインターネットや電子書籍、デジタル教科書といった従来の「本」の次なる展開としての「マルチモーダルテキスト」を対象とした、「よむこと」について、国語科学習活動の創発に資する理論的基盤の解明である。

メディア・リテラシーやリテラシー論における教育学的・社会学的研究や、教育工学におけるインターフェイス研究等、国内外の先端的な研究を広く渉猟するとともに、国内外で行われている試行的な教育実践について参与観察研究を行う。得られた成果を批判的に検討し、今後必須となる理論的基盤を解明し、国内外の学校をはじめ関係各所に貢献したい。

3. 研究の方法

本研究の研究方法としては、大別すると、A文献的なアプローチによる研究と、B国内外における試行的な教育実践等を対象とした参与観察研究の2群から成る。それぞれの局面で、国内外の専門家との協働を組み込み、情報提供や成果を対象としたピア・レビューを行う。

A文献研究に関しては、文献収集や議論のために国内外の海外学会へ参加する。

B参与観察研究については、国内外の試行的な教育実践を広く検討対象として推進する。国内外の「マルチモーダルテキスト」関連機関とも連携し、得られた成果を広く発信し、交流できる機会を設ける。

4. 研究成果

A文献的なアプローチによる研究に関しては、戦前から現代に至る広範な期間における「よむこと」の実態を解明することができた。とりわけ、テクノロジーの進展や社会制度の変遷が与えた影響を可視化させることによって、単なる過去の整理ではなく、現代にも示唆となる知見を析出することができた。

検討の際の手がかりとして、言語学者ヤコブソン (Roman Osipovich Jakobson, 1896-1982) のコミュニケーションモデルが有益であった。同モデルでは、構成要素が同

定されている。

コンテキスト (文脈・脈絡)
メッセージ

発信者 - - - - - 受信者
コンタクト (接触)
コード (解釈規則)

ここで注目すべきは、発信者と受信者とのあいだに介在する要素として、コンテキスト、メッセージ、コンタクト、コードが同定されており、これらがコミュニケーションにおける機能を決定すると説いた点である。ちなみに、コンタクト (接触) とは、発信者と受信者との物理的回路・心理的連絡を含意している。素朴なコミュニケーション概念のもとではメッセージに注意が向けられがちであったのを、他の要素も含めて総体的に扱っていくことが次なる課題である。

このモデルは、個人間の対面コミュニケーションを基底として成った所産である。ここには含まれていないが、メディアを位置づける場合、モデルのなかのコンタクトとも照応させたいうでメッセージの要素の内包を充実させていく必要が生じよう。コミュニケーションをちょうどストローのような形状のものとして見立てている点に特徴があり、こうした見立てを導管メタファーと呼ぶ。このモデルは、伝達の側面を説明することには威力を発揮するが、たとえばマス・メディアの発信者をどう捉えるのか、その表現活動はどうあるのかといった点について教えてくれるものではないので、別のモデルや概念が不可欠である。

さらに、直接的な先行研究にあたるメディア・リテラシーについて、次のように、意義づけることができた。

メディア・リテラシーのうち、「よむこと」に関する特徴的な争点として、批判的思考に関連した争点と、映像に関連した争点とがある。

メディア・リテラシーが日本に紹介された際に、批判的思考の重要性が強調された。その重要性については国語科教育学でも、以前から理論的には認められていたものの、実践での着手は限られていた。その理由として、国語科の理解活動が概して教科書教材に閉じられがちで、それも検定制度を経た教材の正確な理解に収束しがちなため、批判的思考の必要性が実感されにくかった点が挙げられよう。加えて、何にでもケチを付けることと誤解され、正確な理解を妨げる因子として敬遠される場面もあった。

そうであったのが、OECD (経済協力開発機構) による国際的なアセスメント調査であるPISA (Programme for International Student Assessment) において、「熟考・評価」という術語が使用され、重要性が強調されたことから、遡って、批判的思考の必要性も認知され、誤解も減ってきた。また、教科書教材に

閉じた授業の不足や偏りを解消すべく、報道や広告を取り上げた実践が登場するようになった。捏造や偏向が社会問題となったことも追い風となり、国語科の授業のなかで批判的思考を育成する必要性が認められるにいたる。NIE (Newspaper in Education, 教育に新聞を) の高揚もあって、教科書に、「新聞を読み比べて考えよう」といった教材が登場し、メディアを比較することの意義が知られるようになった。

一方、映像に関しては、「百聞は一見に如かず」といわれるように、その理解活動を楽観視する向きも少なくない。加えて、17世紀に刊行されたコメニウス (J. A. Comenius, 1592-1670) の『世界図絵』以来の伝統として、映像を利用して理解を助けることは、その後の視聴覚教育を含めて、一般的な指導方法として定着した。見れば分かるという安直な認識に異議を唱えた先行研究は国語科教育学にも存在していたが、それが実践としても各所で着手され、解釈対象として映像を位置づけ、意味生成過程の重要性が認められるようになったことが新たな到達である。加えて、PISA が図表等の非連続型テキスト (Non-continuous texts) を測定対象に含めている事実が多くの教師の知るところとなり、こうした実践の推進を後押しした。

B 国内外における試行的な教育実践等を対象とした参与観察研究としては、当時の勤務大学であった群馬大学の附属学校において実証実験を行い、国語科としての新しい学習指導のあり方の概容 (論文) を解明することができた。そこでこの成果は、以下のとおりである。

- 1) 音声言語活動や音読・朗読活動における能力や評価意識の向上。
- 2) 映像等の視覚的な情報を取り入れた言語活動の活性化。
- 3) 調査活動や、学び合いの機会における情報共有の充実。

合わせて、現時点での到達や課題に関して、次の3点の知見も強調しておきたい。

- 4) デジタル教科書や情報端末等の新テクノロジーの台頭は、ただちに紙媒体の教科書や教材・教具の駆逐を意味するものではない。現時点ではデジタルにも弱点があり、それぞれの長所を組み合わせ合わせた共存こそがのぞましい。
- 5) 今回活用したハードウェア・ソフトウェアは、基本的には大人向け・ビジネス用途のものであった。学校で本格的に活用するためには相応の最適化が課題である。
- 6) 教師が構想している授業について技術的な支援を行う「コンシェルジェ」や、

教師とエンジニア等の専門家との橋渡しを行う「コーディネーター」の役割を果たす存在が不可欠である。

さらに、大前提として、次のような教育的インフラストラクチャーの必要性が明らかになった。

) 学習者にとって必須な知識への目配り。情報端末はネットワークに接続している。もちろん途中過程でフィルタリングを設定しているとはいえ、外部に直接アクセスできる環境にあることは確かである。そのため、情報モラル等の倫理的側面はもちろんのことであるが、さらに踏み込んで、メディアを介したコミュニケーションの基礎理論としてのメディア・リテラシーを学習指導内容に含めて、定着をはかる必要がある。

) 学習者への態度的な指導の必要性。「教師の説明を聞く際には情報端末を裏返しにする」といった指示を通して、態度的な指導を行うことも不可欠である。学習者にとって、情報端末は魅力的なツールであるだけに、学習活動を離れて勝手に遊んでしまったり、些末な技巧に拘泥する者も少なくない。ツールとしてのおもしろさにおぼれるのではなく、何が学習指導の目標であるのか、確認を促すことが必要である。

新たなテクノロジーを教室に導入する場合、テクノロジーばかりに眼が向けられがちである。だが、学習活動のあり方とも照応させて、知識や態度に関して何が必要なのか、つねに問い続けたい。

) 熟考する時間の確保。

各種のテクノロジーの利点として、時間や手間の節約という長所がある。ネットワーク環境が充実したことで、とりわけ、お互いの意見交換や各種調査は瞬時にして実行可能な学習活動となった。こうした節約自体は、限られた授業時間を有効に活用する点では大きな貢献が認められる。一方で、何でも瞬時にできてしまうという感覚に学習者が染め上げられてしまうことには警戒が必要である。時間をかけて経験を積み重ねたり、迷ったり、困ったり、熟考したりすることから自らの思考を確立することの妨げとなりがねないからである。指導に際して、こうした点には細心の注意が欠かせない。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計11件)
中村敦雄「戦後国語科教育における『読むこと』の学習指導方法論の定着過程に関する

一考察」群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編，査読有，61，2012. 2，1-22

中村敦雄「昭和33年版学習指導要領における読むことの『系統』の検討」群馬大学教育実践研究，査読有，29，2012. 3，1-20

曲瑠瑠・中村敦雄・野坂友里・堀口琢朗・山口仁見「〔伝統的な言語文化〕の可能性 - 中学校国語科教材の検討と開発を中心に - 」群馬大学教育実践研究，査読有，29，2012. 3，261-283

中村敦雄「戦後国語科教育学における能力主義の誕生」学芸国語国文学，査読有，44，2012. 3，1-15

中村敦雄「戦前期における国語科能力主義の萌芽に関する一考察」語学と文学，査読無，48，2012. 3，1-15

中村敦雄「母語教育の発展拡張としてのメディア・リテラシーから何を学ぶか」実践国語研究，査読無，36-2，2012. 3，68-69

中村敦雄「オーストラリアにおける合科的な学習指導の実際」学校教育，査読無，1136，2012. 3，70-73

中村敦雄「国語科教育学における『メディア』概念の射程」国語科教育，査読無，72，2012. 9，85-89

大島崇・後閑芳孝・高橋典平・中村敦雄・濱田秀行・藤本裕一・山本宏樹「小・中学校国語科におけるマルチモーダルな言語活動の可能性 - 情報端末活用による実践開発の試み」群馬大学教育実践研究，査読有，31，2014. 3，1-10

小林正行・中村敦雄・伊藤宏康・片岡美穂・木本悠太・小林香名江・武井彩香・八木美穂「〔伝統的な言語文化〕の学習指導改善 - 落語教材の検討を通して - 」群馬大学教育実践研究，査読有，31，2014. 3，235-248

中村敦雄「説明的文章教材における教科内容の検討 - 小学校高学年教材「せんこう花火」を中心に - 」群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編，査読有，63，2014. 3，1-19

〔学会発表〕(計2件)

中村敦雄「情報端末活用によるマルチモーダルな言語活動の可能性」第124回全国大学国語教育学会弘前大会，2013年5月18日

中村敦雄「説明的文章教材の学習指導内容の変遷に関する一考察」第125回全国大学国語教育学会広島大会，2013年10月27日

〔図書〕(計7件)

井上尚美・大内善一・中村敦雄・山室和也編『論理的思考を鍛える 国語科授業方略 小学校編』溪水社，2012. 3

井上尚美・大内善一・中村敦雄・山室和也編『論理的思考を鍛える 国語科授業方略 中学校編』溪水社，2012. 3

日本教育技術学会研究開発チーム編『映像&活字で“プロの授業”をひも解く3 伴一孝：5年国語「事実と意見」の授業』明治図書，2012. 3

国語教育研究所編『言語技術教育研究 新しい授業の提案2「習得と活用」を重視した授業』さくら社，2012. 5

東京学芸大学国語教育学会他編著『小学校子どもが生きる国語科学習用語』東洋館出版社，2013. 3

全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望』学芸図書，2013. 3

大熊徹他編著『国語科授業を活かす理論×実践』東洋館出版社，2014. 3

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 敦雄 (NAKAMURA, Atsuo)
明治学院大学・心理学部・教授
研究者番号：60323325

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：